

学位被授与者氏名	大石 柳（おおいし やなぎ）
論文題目	ACE s（逆境的小児期体験）の及ぼす影響とT I C（トラウマインフォームドケア）の取り組み ～トラウマセンシティブスクールを目指して～
論文審査結果の要旨	本論文は多くの困難な課題(発達特性、虐待的養育環境など)を抱える生徒が通う単位制高校において、教職員がT I Cの考えを理解し、T S Sの理念に根ざした学校づくりを進めていくための知見を提起することを目指した実践研究論文であった。 日本の教育現場でもようやくACE sが子どもに及ぼす影響と学校現場におけるT I C（あるいはT S S）の取り組みの重要性について認識され始めたが、まだ多くの学校ではT I CやT S Sの考え方についてはほとんど浸透していないのが現状であろう。 筆者は養護教諭としての立場から、特別支援教育コーディネーターなどと連携しながら、被虐待状況に置かれている生徒や発達障害の二次障害を抱えている生徒、小・中学校時代から長期にわたる不登校傾向の生徒などへの丁寧な支援を長年にわたって行ってきた。 さらに、本年度は教職員がT I Cの理念に基づいた生徒理解と援助方法についての知見を深めるための研修を実施している。これらの取り組みを通して、筆者が大学院の中で学んだACE sの累積を抱える生徒への理解と支援の課題やT I Cの理念を、校内研修やケース会議などを通して発信しており、少しずつ、教職員の理解は広がってきている。 もちろん、T I Cの理念を基盤としたT S Sの実現に向けての取り組みはまだ始まったばかりであり、多くの困難な課題をもつ生徒が入学してくる学校現場の中での課題は山積みであることも否定できない現状であろう。 また、筆者自身も被虐待状況に置かれた生徒や発達障害の二次障害を抱える生徒への日々の支援に追われ、先行研究においても、また事例分析においても、今回の論文で十分な整理がなされていないところも多くみられる。たとえば、第一章でACE sの否定的影響を緩和し、子どものレジリエンスを高めるPACE sの体験の重要性は指摘されているが、第2部第2章の事例検討の中ではほとんどこの問題には触れられていない。 また、T I Cの3層構造を文科省の生徒指導の4層構造と関連づけて捉える提起はこれまでの先行研究では見られなかったものであるが、文科省の生徒指導の4層構造の第1層の発達支持的生徒指導はPACE sの内容とも深く関連しており、その意味ではT I Cだけでなく、PACE sの理論的・実践的な提起を統合したかたちでの提起を行っていく必要がある。そして、それはおそらくT S S（トラウマセンシティブスクール）という概念には包括しきれない広がりをもつものになっていかざるを得ないのではないだろうか。 このように多くの課題は残されているが、今回の論文がACE s体験を持つ子どもを適切に理解し、そのレジリエンス（自己復元力）を高める支援を行っていく学校教育システムの実現に向けての知見を提起する第一歩としては意義がある論文であったと考えられる。 2026年2月18日に、北九州市立大学北方キャンパス本館B-205教室

	において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。
--	---